

八木秋子著 近代の〈負〉を背負う女 八木秋子著作集 I
江刺昭子 図書新聞 1978/6/24

女性のアナ・ボル論争

『女人芸術』誌上で藤森成吉に公開状

江刺昭子

近代日本における女性アナキスト五人をあげるとなれば、明治に管野すががあり、大正には伊藤野枝、金子文子があった。昭和になって光るのは高群逸枝、そして五番めに私は八木秋子をあげたいが、秋子は前の四人ほど世間に知られていない。知られてはいないが、その思想の熱度と働きの熾烈さは四人に優るとも劣らない、と私は見ている。

思うに、管野、伊藤、金子の知名度は、多分にその非業の最期からくる興味に支えられているふしがあり、それ故にさまざまに語られ、書かれはしたが、アナキストを自認した彼女たちの思想と活動の跡を仔細に点検したものはほとんど見当たらない。高群逸枝は後半生を賭けた女性史著述の偉業ばかりがクローズアップされて、これまたアナキストとしての活動にメスを入れたものが少ない。

つまり、日本の女性アナキストの思想と活動は、今以て大方が闇に埋もれたまま、婦人解放運動史やアナキズム運動史から看過されている。このいさか片手落な現状に、今まで毀誉褒貶の外にいた八木秋子の著作集『近代の〈負〉を背負う女』の刊行は、異議申し立てをしているかにみえる。

年譜によると、八木秋子は松本の女子職業学校を出て、二十二歳で結婚したが、愛のない結婚を破壊して家出、女中、小学校教師、新聞記者となって自身の生活を確立する一方、社会運動に接近し、やがてアナキズムの立揚を明確にしていった。三十三歳のとき、『女人芸術』の同人として編集にも参画し、ほとんど毎号評論や創作を発表した。引き続き、アナキスト系の女性の集った『婦人戦線』にも参加し有力な同人となった。

著作集にはこの時期『女人芸術』誌上に発表したものが主に採録されているが、興味深いのは、それが発端となって十数回に及ぶアナ・ボル論争になった藤森成吉への公開状である。この中で八木秋子は、戦旗派の旗手・藤森に、作家の「誠実」と「イズムの政治目的のために書かれる作品」との矛盾についてせめよった。それに対するボル派の反駁、更にアナ派による反駁と続いたこの論争は、女性の雑誌における女性のアナ・ボル論争として少なからぬ意味を持つものである。

当時のアナキストの最大の文芸誌『黒色戦線』に発表した「一九二一年の婦人労働祭」も読みごたえのある小説だ。革命ロシアの反革命運動に取材して単なるレポートに終わらせず、小説としてまとまっている。ほかに短い文芸評論や旅行記も収録されており、いずれにも非凡な洞察力と表現力がうかがえる。このまま文芸家としての道を歩めば、異彩を放つ存在になったろうと思われる。

が、秋子はこの後、かねてからの主張である自由連合社会実現のための実践運動に挺身した。もとより報われることを期待できない運動であり、泥にまみれ、傷つくのも覚悟だったろう。その時期の発言がどんなものであったか、続刊が待ち遠しい。(筆者＝女性史研究家)